



新田義統功臣録初輯卷之五

日本刑法草案

公子奉勅歸東門話

客路遭難得眩眩話

放 2015

東 學

却説這裏めと新田德壽九兵衛日主帰八郎を従へく驛路恙あく金  
 剛山五至りけきとある民家小宿りを需ち四人とてゆゆしく高議を定  
 め共司の妻むり微々四條中納言隆資卿のりふ至り北の方まけりて  
 詭ちりハ過し延文三年冬口の凶變ありしと百折千磨を経く德壽丸  
 今もや成童をむむ多ひめ且ハ父祖の志を繼朝敵を亡し聖慮を身  
 へ奉奉はへき心煩なりとて人も其の威福やきとまへ人を制するて  
 りも故に天朝の官位と凶徒追討の制書とを賜らんとすく東國に上  
 たりて偏に賢相の洪庇を願ひ朝庭の首尾を整理し私に奴才を

繪本義経物語卷之五



新田徳  
多内  
相殿  
追討  
直吉  
多々

慮を窺ひたりと揣摩了半响嘆ち自ら隆資卿も其志の健勇  
 なるを感ずるひ則徳壽丸も對面し其容貌を着るのみ恰も天皇の如く  
 窈窕くもちみちのげり威勵を言うるの實見も源家の嫡家たるに徴  
 あく行さき憑りき光景あれは顔も待遇もも朝を志し聖  
 慮を伺ひ君も我負の孫なるはを関しめ龍顔最もかく  
 這事なる何あべと勅を下し多人の諸御詮議ありを切の官職を  
 賜りして先朝其例なられは此に差しゆる君も朝政の務り  
 理會官位を任じりて只朝敵追討の宣旨をを下し多ひ世に  
 ても切あふ重く位階を進めり人の別勅ありは隆資も喜ぶ  
 みの奉勅も朝庭を退徳壽丸も遣く勅詔の旨を仔細に分説て判  
 書を迎ふひり徳壽丸の十分れ望望足らむといへも六七分の宿志を

遂にこれハ大々喜び聖恩の天水もきを感佩し勅書を拜接隆資卿成  
 厚く謝し辭し旅亭に飯り主従相議し朝庭の議論も道理あ  
 まハなる東別は飯り早く功を建てるに當りし而すも便宜有  
 り兵司の毒もとどまりし隆資も兵部侍郎の信を耳くハ火速ふりを  
 討ふべしと物をかゝる人の門ハ這南山を記程するが兵司想らくこの  
 序に小衛内は京師の地理を見せはわらせ後日兵を用ひもふれば  
 助け申做ちやんりのをと思ひし洛陽も生くることすを未だ一頃觀  
 しく忽清水の辺を過ぎるも兵司徳壽丸も對しきらく此圖通伝  
 も無量の利益あり昔より今に至るも靈驗ありしは小衛内  
 也も宿志の速申すを祈らる人といさあひく武士職も福也  
 香を焼拜を做し宿願の事を祈終り既小衛を下らんす

折ふ只着面前より一個の漢子来るありちうくちうく共司端詳  
 井井の彈正の男兒求馬なりは是ハ便叫ぶる云足下ハこれ井井求馬  
 廢やと又ハ彼漢子愕然とし仔細共司の面貌を着て居るなり  
 貴客ハ由良兵衛大司馬の在りやと又母なる其恙なきを喜ひ傍  
 へ往く求馬涙を拭ひて説話するハ小人矢ハ凶變の影向をせられた  
 ちハ東列女赴くとせし耐遠般々此事ありとすへらねりといふ  
 の人の首尾を詳よの近頃東國を想ふ心頗母しくと赴くとす生  
 とも小荷内をたじめ舊好の人の所在も知れぬハ遠圓通徒佛を祈  
 ちりて其便宜を索せりと如斯願書をこめちり人爲るよ来れり  
 と一封の願書をとり出し偽りなき赤公を示し是ハ兵衛大司馬願書を  
 願ふも甚切なる志をのへきりしハ之ハ威ド徳喜丸と八郎と識判

すまハ求馬ハ喜ひ板を比し徳喜丸を殺し想ひ涙を流しちり  
 此時共司進出く矢ハ凶變の后縁列女潛居今年南山に赴き勅を奉  
 り只今東列女願する有枝有葉を細的小説て后云らく我洛陽に公服  
 の人なきことを常思ふ幸なるも是下此處にありし皆く東  
 行するを思ひとすりて幾南のちめて同志の們をかゝり且九列女  
 新田の人へも謀し合小荷内洛陽に旗を入りちり其の力を扶くこと求  
 馬を此地方に留するべきは評議を定め其夜ハ求馬が家へ宿りて是  
 ちハ十六日なり此うち洛中洛外を熱看巡り終り別を傲し東列  
 女に赴するが日數少りて武列川崎の驛に桂遇し此日既ハ天色暮ん  
 ち遠寺の鐘聲撲雲に御音疎林の妻鴉晚烟に攘鴉翁を伴  
 ち等よめる西風ハ瀟々薪を屑く山を下りあり實ハ晩の光景ハ

那里も一般慌忙とて其凄然きりて之の門々早く宿りた案合高  
 路を急ぎ歩くと一里を御所へ面筋を着て激たる大河より足  
 名目しあ玉川の流りて這所へ則矢口の津ありて其六猛然とて義  
 興公の戦死を記性快名懐奮の涙を袖をぬらし少刻時を過ぎ  
 たり時は丘司が云らく故君の靈廟對の岸はありと算て早く川を  
 づりて靈神を拜せ入らむといふもく實もて假所這所を着繞  
 渡船やあると尋ちるも只一艘の舟をもたか胡然水面を空  
 ち姑もちる処五猛着の敷蘆葦の生茂きる裡より一艘の小舟を漕て  
 出まありて之の門々これを着て大は飲へふおもも八郎進出を  
 揚高中の舟はくややく船梢も其船も我門を乗て世川を渡せばま  
 やしづるも船梢の声は身へするもや遙か顔へ何中へはげやまき

かり顔頭を船を漕て一盞も時舟岸下見着ぬ二人喜びて先行を  
 を取船中舟楫へ續ひて船の上るれハ船梢くの模様を孰く見  
 満面生春色はる舟楫を揺ゆ遥の岸を望ん漕生ま二人船  
 中もあつて頭を回して四方を望んこの川の流りて急はく激  
 激とて暗をおらりし水声洶々と漲りて耳に響き甚凄しき光景  
 既にして船中流に至りて舟楫俄に櫓を拖起て二人對ひて  
 旅客ホトとて今宵宿りを需多ひはるめ小人能所へ誘ひて  
 するも些き酒錢を惠多ひあるや丘司はく吾も酒錢を  
 へんと思へ今幾許の酒錢をとりて奈何なる好所へ誘へる  
 笑く云是多くは錢を平ゆはるも僅か宿等二人の行李も  
 身邊に纏る衣服刀劍に至るも残ちるも願て得た

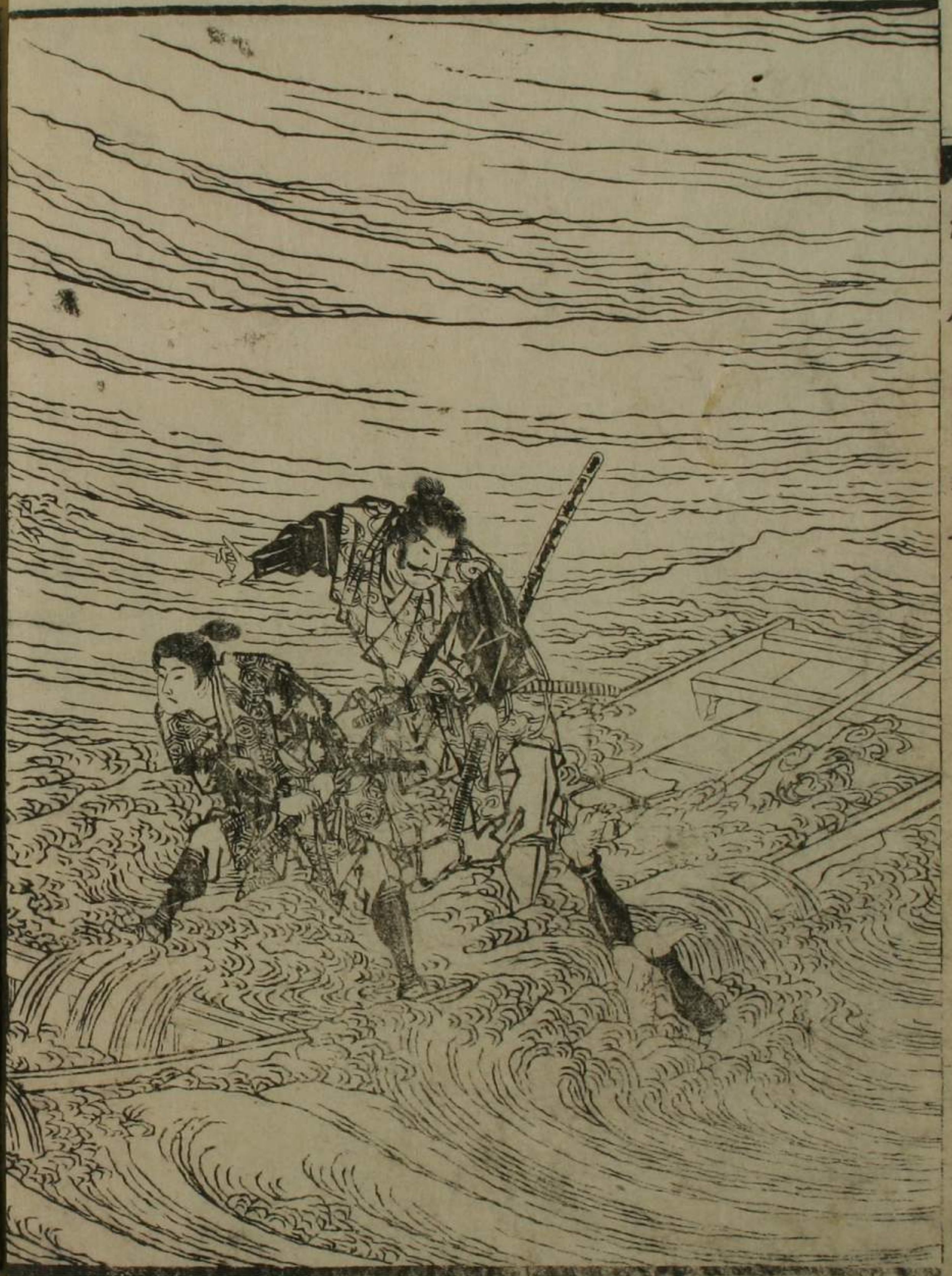
彼貝闕(送)りて人足遠きもあはれ此河の底に乃貝闕(送)りてあり  
 若水(濁)はしを厭ひしむるも好(物)ありと表(の)らるる明(是)  
 各(微)送(送)りて在(り)る八(郎)進(出)て云(わ)ねて汝(は)海(賊)やうと然(し)て八(郎)進(出)て  
 命(の)を以(て)し我(我)們(を)常(常)の旅(人)と見(し)て汝(は)堅(固)遠(く)の(は)しと運  
 命(の)を以(て)る所(を)然(し)も我(我)輩(素)に好(ま)む身(の)連(れ)船(を)對(の)る  
 漕(舟)ありて一(命)を取(る)の(う)まき辛(苦)錢(を)らるる也(也)若(然)る(に)と云  
 今(今)立(地)は性(命)を絶(え)んと志(し)る時(時)船(船)梢(を)宜(い)く一(言)の德(徳)を  
 も乃(乃)も彼(彼)朴(刀)を閃(ひ)て斬(き)て想(か)へ猛(勇)を倒(た)し水中(中)に跳  
 つて失(ま)さるる二人(二人)の輩(輩)を看(み)るも奈(い)何(何)なる事(事)を(と)做(す)と怪(怪)し  
 想(か)へ其(其)處(處)は忽(忽)然(然)として四方(四方)の草(草)蘆(蘆)深(深)きらるる五(五)六(六)艘(艘)の小(小)船(船)頭(頭)

出(出)れ渾(渾)て賊(賊)船(船)也(也)し毎(毎)船(船)は二(二)四(四)輩(輩)の賊(賊)手(手)は兵(兵)器(器)を執(執)り進(進)み  
 来(来)る二人(二人)の原(原)来(来)武(武)技(技)は精(精)き勇(勇)夫(夫)かたはこれ(これ)を看(み)るも懼(おそ)れ  
 逆(逆)令(令)既(既)に戦(戦)んとす時(時)は定(定)料(料)人(人)や舟(舟)を船(船)底(底)俄(俄)に破(破)れ水(水)滾(滾)々  
 と湧(湧)りし二人(二人)は根(根)根(根)すまじも没(没)理(理)會(會)唯(唯)切(切)齒(齒)牙(牙)を咬(か)み憤(憤)り斗(斗)り  
 たり兵(兵)司(司)怒(怒)の涙(涙)を拭(ぬ)き天(天)を仰(あ)げ嘆(なげ)息(息)しく云(い)はれ呼(あ)い息(息)是(是)如何(如何)  
 亦(亦)休(休)運(運)塞(塞)めく主(主)家(家)相(相)繼(繼)り同(同)し此(此)水(水)庭(庭)は亡(亡)りし身(身)やと声(こゑ)を發(は)つ  
 る哭(哭)る原(原)来(来)此(此)の身(身)も氣(き)を船(船)底(底)に孔(あな)を鑿(う)り上(上)柱(ちゆう)おきりて先(先)に  
 水中(中)に跳(と)り入(い)る船(船)梢(梢)を後(あと)に故(こ)今(今)如(如)斯(斯)水(水)船(船)中(中)に湧(湧)り入(い)るなり  
 這(這)時(時)八(八)郎(郎)はいづれも小(小)荷(荷)内(内)を助(たす)る身(身)もせんと德(徳)を存(ぞん)九(九)の身(身)を接(接)  
 る此(此)一(一)間(間)ありし賊(賊)船(船)は搭(た)後(後)らんと志(し)りし彼(彼)は九(九)の身(身)を接(接)  
 水中(中)に陥(おと)りし八(八)郎(郎)は驚(おど)き猛(猛)勇(勇)を以(て)て固(こ)く水(水)中(中)に跳(と)り入(い)る共(共)司(司)も



徳喜丸全滅  
先口にて  
水難に逢

徳喜丸全滅



徳喜丸全滅



く大に強き俱に水中へ入るとすると思ひもろぬ背後より一條の釣  
 索を垂れ身柱を搭任仰向に挽倒すに犯人とするを前後死せしむ  
 勢に賊をりかきありとぞ綁りしり素這兵司にすねる勇まなりとぞ  
 徳壽丸の水に陥りしを著しく心狼狽せし故にむほしく手をけり橋と  
 へあまり此時兵司の心中焦がしく足さく千辛万苦を做けりも悉く胡  
 びたりするも且怒り且悲に躊躇もうち舟對の岸より名一の大勢の  
 賊尤右を取圍く岸よりしり山腹溪間渾く踏まき所を牽扱れり  
 り六七十町左側しり林樹陰に生茂るる大岳に至り尚此林中に  
 つる事、四町しり高く木柵を圍るる處あり裡へ入り着まの中央に  
 一座の首 廳ありしり両辺に四五軒の小屋を建連しり此折しも捉へまはる  
 賊何事、高く叫ぢられ裡へも多くの賊も出づ廳前を湧ひり此

屋燈火明らるる戒器嚴立たるに双邊より惡鬼羅刹の如き大  
 漢子個々腰間を両の柵子を佩威儀を整へり班部も此時ありて大  
 王とむほしき漢子出まると方襟の上座を這への顔貌を著る色皎  
 く眼爛るしり身杖の足より威威威威なる大まなり兵司腫をさめて  
 着一着は女如兒が割了袷襦の丈夫水瀬九郎ありしり愕然とて大に怪  
 し直怒唱しり汝女婿何ぞ如斯非義を做せと叫びまはれ大に此言を  
 聞眉頭をへ從てこれを着て大に咆的慌忙しり座を跳下急し兵司  
 が綁を繞席上し請し棟燈也以拜しり小人眼ありあがり岳父せり  
 を知らざるなり不礼を做しり罪を計るる所はしり附詞しり統りさ  
 り兵司又罵りさるる弒逆の惡賊焉と繞へし人せりけりあはれ  
 九郎悔んしり岳父何の道理ありて斯に宣ふぞいぬ矢に凶聲は

新本登陸集卷之五

衆星降

右衛門故君の幕しく小く獨此地を去りて後館言の志歇時ふくゆる  
 生業を徹し一豪傑の志を聚小衙内の御行衛を捜索し志を遂げ  
 想へるるを何ぞ試逆の賊なりんや今又岳父は先れを徹しけるへふく  
 近頃悩ありとありと久し久し對に出ざる故は今日のみも都々部下の所為  
 申し彼們素岳父を面詰さる故なりと分説をひき兵司怒氣少し  
 く抄ぎく云ら酒家心迷乱しく言前後はなりともかかぬ小波の異む  
 も道理なりといぬ去は太故の后小衙内を將ひ総列は縣一審初より今  
 回南山に赴き朝敵追討の勅宣を蒙り飯路の南所今日の危難に遭  
 徳壽丸八郎の二人入氷の事あり今洋に説りれば九郎愕然としく忽  
 面色蒼土のてしと變じたまを放ち天は號地は哭きりる漸く心を  
 静めく云ら天は善福悪は福もくせり然るも小人不肖なりとて

信を以て十清九濁の歎難を請て只顧豫讓を仰い徹つ忠臣此  
 信を以て一皇天何の惡もあらずありてか世に類なき試逆れ太  
 罪を下ししやらん手を咄きを握牙をわしとくそなた人への痛  
 腰間の匕首をぬき既に自らせんよりを兵司を奪りてるるを  
 かゝらるる云ら汝何は復恨らる死を走百病も今このまゝ死  
 ふへ泉下もあらず何の顔せありて故君を見んを人への想ふを不  
 如小衙内のもろ戸を捜し索厚く葬りて后は死ももほりじしと諫め  
 れば九郎げせり想ひややく死をそほりて兵司を附し主見の戸  
 を捜し兵司一答見此所をもち生する義興公の靈廟に詣りて  
 へし彼所に至る時や五更の云わたり二人へ神廟の裡に  
 香を焼拜を依し叩頭し罪を謝し廟を退らんとし兵司停す

着るふ二人の漢子睡り居りしうは甚憐れく着る着るは往き九郎  
 の二人がうりしう六太五唄的慌忙し呼起し其恙なきを喜び次  
 九郎を識荆昨夜よりれて細やう再説九郎の只願感涙をむら板  
 地を礼を傲し厚く踏み再世徳壽九も赤びひて宜りく汝等足  
 等我爲し忠をそまて感する再縁あり尚此上見方力を合々酒衣を  
 持志の遠得るしを憑たりあれ父祖の世はあふ汝未だ忠良  
 のこのハ位祿俱ふのさうさきや又眼は涙を流させ又ハ二人の門々  
 小衛内仁愛ある志のほども感佩し暫く涙をうけたり此時九郎を  
 八郎再對し別離の後恙なく今日奇遇するしを喜び互に懐舊の  
 情をのぞく涙を沈むるやあり九郎云らくさうや何しう  
 こゝに在りしと定は八郎答く云らく前刻小衛内遊を遊んじて過

く水中に陥りしハ小人を獲り跳入るや水底を鑽りて足を取  
 水を熱く對の岸より上りり耐小衛内水中に沈まじく苦しむる故や  
 渾身冷て息もたげよ又さをもへハ火にあがり茶をすくんとす息も  
 嚮の強動し身邊に肝のその毒くさひく没理會を何せんとも  
 折うし面前の小徑をよつ一個の官人若干の従僕を従へあり  
 声を揚ぐとれ告ぐ云我徒賊難再遭相伴人如斯悩めれ願くハ  
 薬の貯へしあふ少く惠と乞ひ多那官人立住我門の模様  
 をとくさぞ難儀もあはれ我ハ此近き所のよかり我家に  
 湯茶をよめし則湯をたれ往事七八町只是此し勿忘仕置  
 家に至り是則官人の家なり裡にわれをかくし人出まらば小衛内を  
 母保りるほは松木快三やう多ハ彼門の甚ま喜べる野々今月

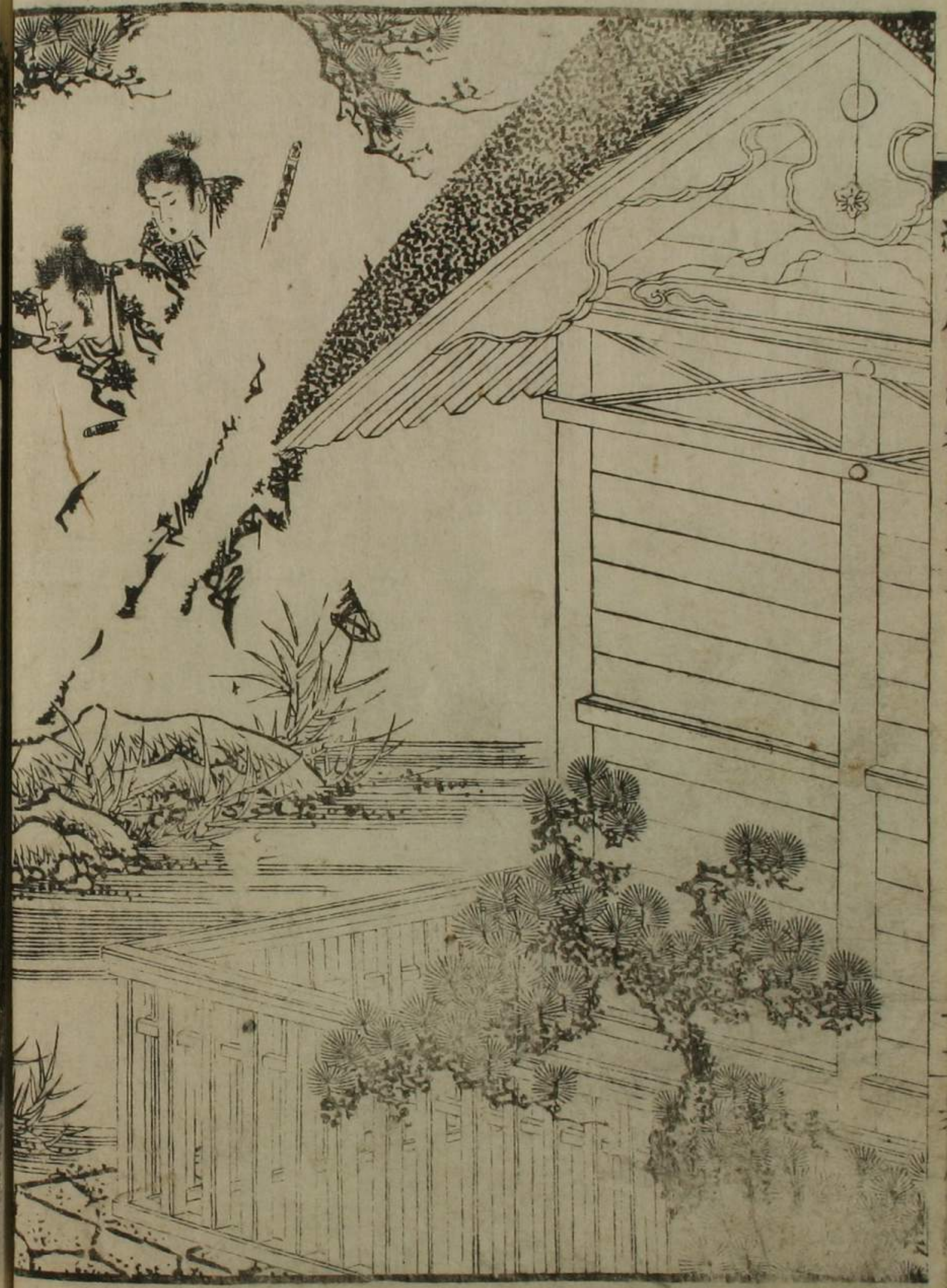
くらむ容り身と厚く食へ居りて多る人衆は其心を見入るる事  
 なる所も頻りに其の叫声は聞ゆる甚怪しくいそぐ起りて声なき人  
 忍往く窺ふ家の後なる林中ありて人の漢子を縲縛一個の漢子  
 これを楯にありて心中大に怪しく想らるる是必賊の住地なり  
 ちりちり木もはざりき龍潭を避く虎穴に入りて心なき人  
 楯人を着るは怪ひる家前年去はむおひてむきりし足六郎は彷彿  
 其の思ふべき声を揚げてこれを呼ばれれば人顧みず我小母心を煩  
 ましてあれ今日の事京都義貞公の神通をりて主従を合せえ  
 う為なり前刻の官人則義貞公従者の我門士の一人なり大の所を  
 是神廟の地なり天明の必兵司小母九郎と申廟は獨りて未だ  
 申府好高議し九郎の原のこゝ此地も山置兵司といふは衛内

一は従ひて総別へ皈へば自天車は人且らぬ緋おく徳島山道は同  
 しく尾張守江戸徳理亮の之なり世に義興公を騙りて怨敵なりしを  
 先帝摩醯修羅王の勅許を得て此所は暫く苦める事既に一年餘れ  
 了今ハや誅せんと決まると近きも其の亡臣實は汝お忠臣  
 の赤心の冥府におひて諸神靈も喜び感得るは尚急ぐべし是亦  
 此事を告げん為汝に茲へ来じやうと云々想へ一陣の風吹  
 まつて足六郎をたぬ緋をらする人の徒も猛然として消えて只  
 着十餘光の神火赫々として川邊をけり飛去り跡は惘然として小  
 衛内と小人二人のこゝ神廟の裡はあり餘りの不思議は四方を回顧  
 中央に新田靈神と寫る額ありこれを着て感佩し絶てて神靈に  
 祭約し疲勞を散へし折つて二位のまゝとて説話する



徳壽元主様  
神の告を告る

徳壽元主様



徳壽元主様

徳壽元主様

兵司九郎の二人嘆然とて奇異の思ひをふし神靈の新あるを感  
し各感涙を催し立ち斯く四人の神の告を任せ二人は総司を  
九郎の如原此れとてさるべきふ高議を定むる九郎の塞中に入りて  
らく旅の勞を休ひしなり

貞児代嫁助賢夫話

沈痾全愈遭異人話

且説も徳寿元主従の既も武列を旅發し総司の飯工来りしなり  
莊神惠仲等之は喜びやん南山の動静を問へ詳し勅書を得る  
るに正しく清水も井の求馬も奇遇し矢口もあかき危難ありし水瀬  
九郎も遭りし神靈の告ありし一五十一を細申す説話も人々且喜ひ  
感したる世時莊神がえり斯一時は舊臣も會して神靈の告ありし

以ての將は是發達の時運の至りありし早く旗を揚ぎ年頃の宿志  
を遂げしと是より只顧此事の計候をぞ做ししる處も豈料んや  
當時一件の不良の事をも出来しなり其後喜丸も鶴も矢口危難の時  
久しく水も望りし故ありしを御母思慮を發ししも美少年の  
軍あり容貌猛し愛し其醜態之き方なく常々體計出で衣服を  
汚し臭氣病床も餘り人車もあがる目どらるれば兵司も嘆的火速  
に惠仲を請り治療を需むるが素より明醫の療する事なれば自ら  
添く漸く休むるも却て心も高いまも全愈を得て兵司八郎五十  
熊の三人の腹食入る忘れし少刻も病床を去る侍病ありしなり  
も素是丈夫のことなれば婦人の加護するが如くおれ不如此折しも兵司が  
渾家の南山よりあり居るなり母の如くおれを護り八郎渾家兵司女見

あつた方母信一病を助けやせんとも徳壽丸の我室多き  
 をりく徳を年少の婦を掛榻近傍に寄りてかゝ足を拒めぬ兵司も  
 八郎も及理會二人私母高藤へ云小衙内の宣へばはやくござるはり  
 病の全愈する期何ん早く玉琴を定めて傍み置か他の婦人交う  
 も拒めぬまじと兵司きう玉琴浦かりとみ至りてとらゝの説話すも玉琴  
 と素より徳壽丸の病のけを記掛を折れね仔細ありてもかひいれざ  
 良辰をとり玉琴を運るべく既約をなす兵司を帰せしめ此も妻や  
 女兒も説話く其準備をなせりと玉琴が紅雲の邊も素より只聞葉  
 子哭しけり高頻わらふ女住も慌忙に裡に人々も小玉及今哭卧し  
 居るを渾家脊梁を撥く均しく哭き居る玉琴は玉琴は玉琴は玉琴は  
 對ひく云り玉琴何れを玉琴何れを玉琴何れを玉琴何れを玉琴何れを

又らく人の世を渾善を好し悪を厭ふ是天下の通儀なり老翁は  
 なるをわたりて多しぬ女兒を諸天善神の所にさるる瀨漢子の如きいと  
 妻もよく做るる玉琴は痛喚の如く老媽胡亂の玉を宣ひて酒家何の玉  
 ありて玉漢子を婿と做る妻も玉琴の玉琴の玉琴の玉琴の玉琴の玉琴の  
 玉琴の玉琴の玉琴の玉琴の玉琴の玉琴の玉琴の玉琴の玉琴の玉琴の  
 の風声頻どれぬ女兒は玉琴を玉琴を玉琴を玉琴を玉琴を玉琴を玉琴を  
 玉琴の玉琴の玉琴の玉琴の玉琴の玉琴の玉琴の玉琴の玉琴の玉琴の  
 玉琴の玉琴の玉琴の玉琴の玉琴の玉琴の玉琴の玉琴の玉琴の玉琴の  
 玉琴の玉琴の玉琴の玉琴の玉琴の玉琴の玉琴の玉琴の玉琴の玉琴の  
 玉琴の玉琴の玉琴の玉琴の玉琴の玉琴の玉琴の玉琴の玉琴の玉琴の  
 玉琴の玉琴の玉琴の玉琴の玉琴の玉琴の玉琴の玉琴の玉琴の玉琴の  
 玉琴の玉琴の玉琴の玉琴の玉琴の玉琴の玉琴の玉琴の玉琴の玉琴の  
 玉琴の玉琴の玉琴の玉琴の玉琴の玉琴の玉琴の玉琴の玉琴の玉琴の

母怒狂々車を行入とせし好く沈思する今我意を檀うせし玉琴  
 必ま死すべし然るもまきの此車公母なりと若くは密謀の妨めたる  
 らち獨心を苦しむ偶々想ひ立ちしめ頃惠仲が女貞児を我家  
 子養ひ置り然れは是孝子しむ容貌も也艶やればこれを我女児とし  
 く徳壽九女嫁が志あらずと妻はひひく去らく不孝の女児命を聴き  
 我をしく不信を作しむ此罪殺まへまあられもさす恩を逆の驕し  
 かりせならん尼法師も做く生涯人の渾家とあまぐり又徳壽九女室  
 ましてハ叶はずし其の惠仲が女貞児と才貌双全しむと人々悦  
 きまのなればこれを我女とせし玉琴代に徳壽九女送るべ  
 今斯のこころなる人の義もむひ負児を玉琴より愛せしむハ叶  
 べしと妻喜ひく肯ひまがら負児を呼く夫婦均しく玉琴不孝

母親の命も背親をしく信を失はしむるも嘆く后以不孝  
 の子ハ尼法師もふし汝を我ハ夫婦の女児とし徳壽九女嫁が志んと思  
 へり願くこれを肯ひまがら負児を呼く夫婦均しく玉琴不孝  
 を宣く信も應答へま言を逆の驕しありまの二盃茶時ありて以  
 奴が徳壽九女嫁を厭ふハあまがらも只賤をせし肯代ハ天の怕  
 ありと固辞し然れも夫婦右説左説する負児今ハ辞む門踏あ  
 へ去らく奴が身も老翁のその意も差へま何れも遠事半は知  
 てハ父も一回告ぐ后命は從ひ去らんまし莊神の酒家も志んり此  
 意ありと急め人せし惠仲を叫まじむ此回の一件を詳し説話し負  
 児を女児も費ひ得く徳壽九の妻と志んりまを乞まされハ惠仲  
 々とはみく云負児とくハ素よりその意のまがらうと又此車は於てハ



後日六姐の恨よりありぬじと再之辞ましくも夫婦さへもやは  
 すすみ願乞ふ事りれい惠仲せんまおく附し其意も任せり斯く  
 莊輔再の兵司をまき玉琴不孝より貞児を女と偽り替り代ら  
 ちひき有枝有葉を説話く且云酒家不肖母し子を教ふは道  
 を失ひ今かるとも乃どくこれ推量所も恥らひしとくども如斯き  
 るしき我々の密謀化し漏んしを怕るく只得らるる及べり貞児の  
 足孝子母しす才貌双全せられ我女兒おのゝるべきまのむいなる  
 高貴の人れ娘さるるも心かま我まきまひくまする  
 へ我もむなしく疎累さへき北も遠事足下の意もけいお早き  
 を故人兵司が老翁の宣へると道理ありとくも少く心のこを交  
 へがし小衛内もまこと分説く意言をいさすも辞して家へ歸

徳壽丸に對ひて莊輔が云へる原委を細々の説話く行はく如くお  
 做し人々殊なれば小衛内これをひき宣へ我事記さしき室を有  
 つまやし且妻子ありて名志の妨もなせられは恰も好時なり此  
 らまきての得たりと兵司棟頭と云ら其宿志を遠く為しそ  
 莊輔が遠給をも然らむ怒を必ひて彼が意に從ひて人々なり其  
 道理を何とせり我素當國の人心を得られ莊輔惠仲おま玉を  
 笑ひお何んか我ま力を合はし今小人諫を聴ひもされ害あり得  
 お右説を説き進め徳壽丸も實りと想ひもひらるもや終に其法  
 らも從ひもひりりておおわく兵司大喜ひ八郎もかくと告面は庄  
 輔がりし事至りて云らく老翁の宣へるとを小衛内よりさむひり  
 只是命を背じと宣へま早く貞児を送り多くとくも莊輔をい



糸本壁清繪卷之五

負兒徒毒丸  
病若七

糸本壁清繪卷之五

糸本壁清繪卷之五

送るべき日を少し某の目も良辰なまの誓を執正とて一約を定めて  
 別まらりかたはさか萩浦すづあふもく負児を己が女はほしあま玉琴  
 為よりあけ遣はる粧奩衣服残あふ負児よふへ夫婦懇心をもつひ  
 終は徳壽丸のりく人送すれは共司八郎喜びたうとちうは極地は後ひ願  
 小衛内の病を扶け多くとふく頼ちりこも負児ハ徳壽丸は嫁得るとも  
 徳壽丸病多るもちなれは候は醜盃をあすのこもく同衾の契もふく夫婦の  
 恩愛あうらうらうらあり病の爲は容貌變て其醜く常は膿汁出  
 衣服を汚し臭氣病床よあすれも負児少もり正を厭てま穢きる  
 衣服をばううう濼濼日夜貼身く甚濃やのみ加養を做しるを徳壽丸  
 熱々と此動靜をそく胸間も想らおもひまきか美貌の才女志す  
 婉婉うへへへと大に感じ猛然とて愛忠の情發動はま一日病の際

あるとき負児よ對ひくえら娘子を何なる壽命よりて小人の毒と  
 ばり多るぞ小く不幸はく這病を受承く瘡人となりく母もわらひ稚  
 き形もなりぬべきふ娘子をてき賢良の佳人を何ぞ我爲も一生を誤らぬ  
 んや我拙言く恨むまられは速く離婚して良夫を撰みく嫁入負児足  
 を辱くも恨むくわ妾聞とあり忠臣ハ二君よ不仕負婦と二夫ハ更生  
 せと毒不肖と以ても一回君と懇しきれハ何等の事ありも豈異夫也  
 見ゆべき君が不幸ハ即毒が不幸なり妾何ぞ又醜を撰人君その意を易  
 ふく静く病を養ひ多くと赤心を速けれは徳壽丸感賞したへより正  
 りしく夫婦隔心あくそ見へまきり嗚呼這負児が負揮誰の好せす  
 以て毎んや皇天何の景福を下ま下回再解分を聴且説も徳壽  
 丸の病漸くと愈く今ハそや氣力徒なるとても尚瘡痕消すま惠付

かくり止を度はみ是温泉にあらず全愈あるを相ひられ這  
 軍を扱わり各均しく云病の事は只是足下の宜くぞく做し俄  
 旅荘をく之惠仲八郎の二人徳壽丸をいざあひく上毛湯香保の温泉  
 ありそ赴きぬ既し彼所み至り入湯するに二七日をりしに醜かり  
 ちる瘡痕もく愈素のとき美貌の少年となりあひぬ是惠仲も  
 八郎も大に喜び尚今少く湯治せやと止りりる近頃這温泉  
 の山上に紫花真くとく異人來り草庵をむまひ好トを造る人  
 此禍福を示きて毫髪も差はさし一人は是ははまの神仙なりとて  
 信ひ來りトをくふかふか〜然り心も真人の心も應せざる  
 の來らんする日ハか〜これを知り那里へ去らん空菴に影さる  
 あり人も來りざる〜も也忽然として庵の裡にあり素のじと之

不しを徳壽丸聞ひ我後來の吉凶をいやく八郎を後人草菴の  
 地方を宣ひ盤曲高低の山路を躋攀手は原來此山中ハ是人跡絶する  
 幽陰の地し〜烟籠霧鎖古樹枝を連ひて天日を闇く白く〜之  
 にも朦朧と〜東西を軒か〜耳みふ〜の〜山嵐の梢をふ  
 らき〜飛泉の響のき〜聞の〜の〜寂寥とし〜其凄涼地方  
 かく二人是をも厭へて只一味丹過る処も忽ち着一個の老翁鬚髮を委  
 く白きが衣は一領の道服を穿て小一棍の竹杖を携へ飄然として生來  
 不徳壽丸を着て手を揚る挿招ひ〜云らく公子來りて何ぞ過  
 りしぞ我此地に待て日や徳壽丸其怪〜是庸人なりとて〜  
 多ひは眞六謹く〜老翁は是何等の人なりは小人ならんまのを〜  
 五つぞ老翁答〜我ハ是則紫花真人なり二人とを耳〜



山ノ内 山ノ内 山ノ内



茶花真人  
往來九子  
一巻  
接

山ノ内 山ノ内 山ノ内

く急きんき挿さ燈とう也なり似に拜をと云らく小人せうじん等ら真ま人ひとなりと云はるを云ふく重かさ多く金かねを  
 做なり願ねがふく罪つみを救すけり多く小人せうじん等ら後のち毒どくの禍わざ福ふくを示して人ひと真ま人ま  
 點ち頭あたまくく心こころ我われらの心こころ遠とほくを云ふは人ひと為なるはく迎むかへよと人を草庵あんれ  
 裡ら心こころざあい入るはく我われらは是こゝ南なん朝てう先せん帝ていははる中納なつ言げん藤とう房ぼうが先  
 帝てい聖せい王わうははちまはさしも武ぶ威いさんなり逆臣ぎやくしん高かう時じ入にん道どうを誅して多く  
 公こう家け一いつ統とうの世よとさうらずも宣せん料りやうや一時じ准じゆん后ごうの色いろ迷まよへく多く百ひやく折しやく千せん磨ま  
 復ふく古こ一いつ多たる天下を足利あしき氏しの為ため傾かたけらまさしる多く故こゝ我われ忠ちゆう臣しん  
 赤あか心こころをりて教へる諫ごんをせらうく心へも更さらも聴ひも多く去さ御ご存ぞんははやけ  
 且また時じ運うんの勢せいとさむちるを量知りやうち猛まう官くわんを辞して隱いん遁とんの身みとなり生乎なま且また深しん  
 山さん幽ゆう谷こく不ふ遊ゆうへる既すでに二十年ねん小せう餘じゆをがく人間げんふらはさり故あらふ也  
 かろく雨あめを呼雲うん雨う術じゆつとさつ下を飛行ひかうまうく自在ざいなるも且過こ去こ未ま去こ  
 識しりて其その明あきなり然といふも身み肉にく身みをまぬれが身上じやう南なん朝てうのこと  
 を想へる處ところ公こう子し南なん朝てうの為も艱苦くなる志こころざしのたとを愛あいし我今いま一いつ書しよを  
 多たく少くさしき勅しよくをせんと一いつ巻まきの書しよをかへるは是則すなはち諸葛しよ武ぶ侯かうの機か  
 密ひそかる處ところの兵へい書しよなり今の世よ誰たれか能かこれを識りの人ひとかそと化し漏  
 ままとあれ且公こう子しの為ために治話ぢやわさるき軍あり近頃きん細こ川がわ清せい氏しあるも  
 官くわん方かたとなりたる人あり九列りやくの業わざ地ぢ下げとなる人多く南なん朝てうとし勢せいを  
 得える時なり公子し此この時ときに乘りて早はやく東國とうこくに旗を揚げり是れがさまりつたり  
 且また公こう子し一いつ族しゆく旧きゆう臣しん等ら東とう國こく所ところに居る王中ちゆうも當國たうこく榛しん名な嶺りやうも船田ふね  
 入い道にちの子こ船ふね田ふねを武虎こ山さん賊せきの首しゆ領りやうとなり部下か下を多く従したがへる時ときを俟て  
 則すなはちめる年千せん芳ほう賀が兵べい衛ゑの旗はた亭てい也なり忍しのび入る賊なり也後のち孫そん塚つか伊い賀が  
 入い道にち一いつ諸しよ洲しゆうを徑に歴して左さ祖そを聚め復讎ふくせんの志こころざしとなりらりなりこの

識しりて其その明あきなり然といふも身み肉にく身みをまぬれが身上じやう南なん朝てうのこと  
 を想へる處ところ公こう子し南なん朝てうの為も艱苦くなる志こころざしのたとを愛あいし我今いま一いつ書しよを  
 多たく少くさしき勅しよくをせんと一いつ巻まきの書しよをかへるは是則すなはち諸葛しよ武ぶ侯かうの機か  
 密ひそかる處ところの兵へい書しよなり今の世よ誰たれか能かこれを識りの人ひとかそと化し漏  
 ままとあれ且公こう子しの為ために治話ぢやわさるき軍あり近頃きん細こ川がわ清せい氏しあるも  
 官くわん方かたとなりたる人あり九列りやくの業わざ地ぢ下げとなる人多く南なん朝てうとし勢せいを  
 得える時なり公子し此この時ときに乘りて早はやく東國とうこくに旗を揚げり是れがさまりつたり  
 且また公こう子し一いつ族しゆく旧きゆう臣しん等ら東とう國こく所ところに居る王中ちゆうも當國たうこく榛しん名な嶺りやうも船田ふね  
 入い道にちの子こ船ふね田ふねを武虎こ山さん賊せきの首しゆ領りやうとなり部下か下を多く従したがへる時ときを俟て  
 則すなはちめる年千せん芳ほう賀が兵べい衛ゑの旗はた亭てい也なり忍しのび入る賊なり也後のち孫そん塚つか伊い賀が  
 入い道にち一いつ諸しよ洲しゆうを徑に歴して左さ祖そを聚め復讎ふくせんの志こころざしとなりらりなりこの



山崎の真入



真入の物語

山崎の真入

渾公子の去向を捜索する當時に、船田武虎を招き、不日勢を  
 聚むべしと示し、あれは徳壽丸大目喜ひ、感謝して云く、不月の  
 小人真人の教より、白日青天を着るがごとく、年未だ素懐も持て  
 べく想へり、尚短く、天下の帰まる所と、小人の後未の事を示し、  
 乞ふまへ、此時真人一言の應答、あく、双眼を閉はし、少刻や、  
 ひく、天下と、只一極の、二十年を経、おのづから、知れし公子、  
 未だ富貴あり、壽あかべしと示し、おのち、再び眼を開く言を吐  
 黙々として、端坐す、本偶のごとかり、徳壽丸尚、まを同人とする  
 と、手、猛然として、四方霧發り、朦朧として、咫尺も弁き、  
 二人、呆然として、途を失ひ、少刻、漸く霧晴り、征ひ  
 くる、着る、悔ひ、今、紫花真人、那里へ去らん、

影をふかりし、徳壽丸八郎の二人、大まき、奇異の想ひを、  
 真人を急ぎ、山を下り、惠仲、遭く、紫花真人の示し、  
 細く、泥活を、惠仲も、且怪し、且信じ、  
 且歸り、吾司等と、討く、真人の教、  
 畢竟、此們、総別、再歸り、甚事を、  
 做下、回、分、解を、聽



新田義統功臣録第輯卷之五終



新編水滸畫傳

歡醜陳人小枝繫著



葛飾北齋画



新編水滸畫傳 全部百冊  
曲亭主人編

復讐繪本東嫩錦 全部五冊  
小枝繫著

勸善常世物語 全部五冊  
曲亭主人著

小説園雪

曲亭主人著 全部十冊

○前編五冊 當寅十二月出来

